

月刊

みんぱく

◎ 国立民族学博物館

2010

4
月号

昭和52年10月5日第1号発行 ISSN0386-2283
平成22年4月1日発行 第04巻第4号通巻第391号

◎みんぱくインタビュー
辻 信一



自由に作ると見えてくる～手作り木琴ワークショップ

つうざき むつみ
通崎 睦美

数

年前から、木琴作りのワークショップを行っている。

市にて「特産品である竹炭を使って、子どもたちと木琴を作れないだろうか」と持ちかけられたことだ。

当初は、竹炭片を並べて叩いて楽しむなど、単なる「子どもだまし」ではないかと気乗りがしなかったのだが、楽器として成立させる過程を模索するうちに「子ども泣かせ」の部分を含んだワークショッププランが出来上がった。その後、竹炭ではなく加工がしやすい木材を使い、美術作家の面々と組んで、かなり本格的なものを作っている。

このワークショップ最高の山場は、鍵盤の製作、すなわち「調律」である。

一人に一・八メートルの材を与え、自由に切り出し、鍵盤を作ってもらう。説明は

「短くすると音が高くなります。思ったより高くなった場合、裏面を削ると音は下がります」それだけ。実際のところ、同じ長さにしても、木の個性によって音程が異なるので、マニュアルの作りようもないのだ。参加者は、のこぎり片手に大奮闘。長さが一センチ違えば音は大幅に変わる。ヤスリをかけるだけでも音程が変化する。なかなか一筋縄ではないだけに、みんな「音」を作り出すという行為に夢中になる。

ここでは、各自、オリジナルの音階を作ることが、一つのテーマでもある。世界各地にはそれぞれの地域に根ざした音階がある。だから、西洋音楽で標準的に使われる長音階（ドレミファソラシ）にこだわらず、今日はあなた自身が気に入った音階の木琴をつくってみましょう、というわけだ。

最初に、五音階（ドレファソラ）で作られたアフリカの木琴・バラフォン、私の作った琉球音階（ドミファソシ）ヨナ抜き音階（ドレミソラ）それらに加え、とんちんかん音階の木琴などを聴き比べてもらう。

この段階では、断然「アフリカ」や「とんちんかん」の人氣が高いのだが、いざ自分が作るとなると、多くの人が「長音階」に取りかかるのは、おもしろい。

ワークショップの最後は、完成品のお披露目をし、合奏で締めくくる。完璧に調律された「長音階」には皆から感嘆の声がある。しかし、絶妙に調整された「とんちんかん音階」には、感嘆とはひと味違う、ある種の羨望のまなざしが集まる。数時間で作り上げる手作り木琴の中にも、人生観が見えるよううで、おもしろい。

- 1 エッセイ 世界へ●世界から
自由に作ると見えてくる～手作り木琴ワークショップ
通崎 睦美
- 2 みんぱくインタビュー
辻 信一
「ゆっくり」生きること
- 8 モノグラフ
水源を訪ね、異界を知る
吉田 裕彦
- 10 地球ミュージアム紀行
愛媛県西条市「水の歴史館」
人と水をつなぐバーチャルミュージアム
佐々木 和乙
- 11 表紙モノ語り
先住民の思いを刻むトーテムポール
岸上 伸啓
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 万国 津々浦々
湾岸ワンダーランド
アブダビのアラビアンナイト国際会議に参加して
山中 由里子
- 15 時論 新論 理想論
ムービング・イメージ、
それは誰の視線によるものなのか？
岩谷 洋史
- 16 多文化をささえる人びと
「チョーデー」ってどんなところ？
—東京にある朝鮮大学校スケッチ—
宋 実成
- 18 生きもの博物誌
春の訪れを告げるはえ縄漁
〈カルーガ〉
佐々木 史郎
- 20 歳時世相編
セマーナ・サンタ
聖週間だ、盗掘へ行こう！
関 雄二
- 22 フィールドで考える
入試合格者を輩出させる水流
兼重 努
- 24 みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

マリンバ奏者。1967年京都市生まれ。1992年京都市立芸術大学大学院音楽研究科修了。2005年、往年の名木琴奏者平岡養一氏（1907-1981）の愛器を譲り受け、木琴の新たな可能性を探る活動を始める。CDに『Mxピアソラ』『1935』他。一方、アンティーク着物コレクターとして、ゆかたブランドのプロデュースやエッセイ執筆も手がける。

辻信一

「ゆっくり」生きる(再)と

つじ しんいち

明治学院大学国際学部教授

文化人類学者、環境運動家、ナマケモノ倶楽部世話人、二〇〇万人のキャンドルナイト」呼びかけ人代表。数々の環境文化運動や、環境共生型ビジネスにとりくむ。米國コーネル大学でPh.D取得。著書に、『ゆっくり』、『ビューティフル』（平凡社）、『ゆっくり』、『いいんだよ』（筑摩書房）、『訳書』『きみは地球だ』（テウイット・スズキ著、大月書店）ほか多数。最新刊は『しないこと』（ポプラ社）。

「スローライフの思想」を提唱する辻信一さん。自身の活動を文化人類学の領域に限定せず、裾野を大きく広げながら、国内外の実践へとつなげている。

文化人類学が実社会と関係していくべきの最前線にある存在として注目の人物だ

聞き手 中牧弘允（本誌編集委員）

——辻信一というのはペンネームだそうです。その由来はなんですか。

若い頃、日本に合わなくて流れていった先のアメリカで、働きながら大学と大学院へ行きました。コーネル大の大学院にいたとき、日本の雑誌などで生意気に執筆活動を始めたんですが、ぼくが尊敬する鶴見俊輔さんが気をきかせて、授けてくださった名前です。他にもいくつか名前がありました。て、学生たちは「あの人は何者かわからない」と面白がっているようです。名前をいろいろもつ



は一種の趣味で、その方が人生豊かになるとぼくは思っています。

——文化人類学者と環境運動家、ふたつの立場をおもちですが、文化人類学に興味をもつきっかけはなんだったのでしょうか。

大学では哲学を専攻したんですが、実は勉強するためというより、学生ビザをもつ暮らしを維持



辻ゼミの教科書でもある『ラダック—懐かしい未来』の著者で、環境活動家のヘレナ・ノーバーク＝ホッジ氏を囲む辻さん（中段左端）とゼミ生（提供・ナマケモノ倶楽部）

したいというのが本音だったんです（笑）。働きながら学び遊び、旅をするというのがやめられなくなりました。カナダのマギル大学にいるとき、客員として来ていた哲学者の鶴見俊輔さんの授業をうけました。これが大きかった。ものを考えたり書いたりするのが非常に楽しくなりました。それで大学院へ行こうと思っただんですが、実は図書館なんかじつとこもるのがきらいなんです。ああいう空気が流れない場所があんまり好きじゃなくて。もっと外に居られるものがやりたい、自分はフィールドワークの方が性に合っているという感じがありました。鶴見さんの著作にみるような、フィールドでの丁寧な聞き書きというんでしょうか、それへのあこがれもありました。

——フィールドはどういうところに？

ニューヨークや、カナダのモントリオールの移民地区です。ぼくは住んでいたモントリオールの街が大好きだったんですが、そこはフランス語系の人たちが住む東モントリオールと、英語系が強い西モントリオールとに分かれていて、その中間に移民地区がある。V・ターナーの境界性の理論などが念頭にあってこのセッティングが面白いと思えました。

移民地区はユダヤ人がつくっている場合が多く、そして彼らが出て行った後には他の移民、いわゆるニューカマーがやってきました。そこでホスト社会に同化したり、あるいは自文化の維持をしたりという営みを展開してきた。ぼくは、カナダの多文化主義は草の根から育っていったと考えていて、特に移民地区の存在が大事じゃないかと思っただんです。そんなことをなんとか博士論文にまとめました。できはともかく、そこで行っている人々と議論しながら暮らすのは実に楽しかったですね。

——環境運動にかかわられたのは？

ぼくはもともとアメリカの黒人音楽が好きでアメリカに渡ったくらいで、黒人地区ハーレムの調査をしたり、日系人の歴史を調査したりするうちにインディアンと出会うようになった。そこからだんだんエコロジカルなことに惹かれるようになっていきました。またカナダで、デヴィッド・スズキという、インディアンと非常に近いところに身を置いて環境運動している生物学者と親しくなったことも契機ですね。彼はカナダでは英雄的な存在で、特に環境問題では大きな影響力をもっています。彼に勧められてカナダ西海岸の先住民族を訪ねるようになりました。そのなかで親しくなったグループのひとつに、ニスガという先住民族があります。今号の表紙になっていると思いますが、民博のアメリカ展示にあるトーテムポールのうち一本をつくったノーマン・テイトはその人です。ぼくは彼の弟のアルビン・テイトと仲良くしていて、二人を日本に呼んだこともあります。屋久島で、先住民族と森との関係や精神性をテーマにした集いがあったり、屋久島の森で彼らの儀礼をやってもらいました。

ひとつの領域にとどまらない

環境運動家と文化人類学者といっていますが、学者と呼ばれるのは今でも面はゆい。というのは、先住民はいつも問題を抱えているじゃないですか、環境問題にしても社会問題にしても。研究するつもりで行っても、それが他人事でなくなり、すぐに一緒に運動している自分がある。むしろ運動の方に重心を置きつつ、大学で教えたり文章を書い

たりしていこう、いわゆる学者の枠におさまらないのが一人くらい居てもいいだろうと考えてきました。

それと、ぼくはビジネスも大好きなんですよ。アメリカではTシャツ屋もやっただし、カナダではソバの会社をつくりました。ご存じのように北米の人びとにとつて循環器系の病気が大きな問題です。ソバはそれに非常によい効果があるし、ケベック州では良質のソバがとれる。そこに目をつけたビジネスだったんです。途中で日本に帰るのて手を引きましたが、今でもあれは面白いビジネスだったと思います。

ビジネスなどの経済活動、知的でアーティスティックな営み、社会変革のための運動。ぼくが帰国する前から、北米にこの三つの領域を自由に行き交う人たちが活躍し始めていたんです。例えば、パンクの格好をしている若者がIT企業で活躍していたかと思うとWWF（世界自然保護基金）の活動に身を投じたりする。株で稼いだお金で、チリの自然保護のNGOを立ち上げるといふように。

——境界がないわけですね。

そうですね。思えばぼくも学者か、ビジネスマンか、運動家か、というふうに選んだことは一度もなく、ぼくの人生にはいつも三つの要素が絡み交じり合っていた。しかし日本ではこれら三領域の間に高い壁があります。学者もビジネスマンも運動家も互いに拒否感もちあつていて。世界が大きく変わろうとしているときに、昔ながらのテリトリーに安住していられるというのは幻想です。ビジネスも運動も学問も、自分の領域に閉じこもっているようでは将来はないと思います。

——ナマケモノ倶楽部というNGOをつくって代



社さんも役員を務めるカフェ「北のハチドリ」(東京都北区王子)。オルタナティブな生き方やビジネスのあり方を発信するスロー・カフェ・ムーブメントのひとつだ(提供・ナマケモノ倶楽部)

ようにと、全国あちこちにいわゆる「スロービジネス」ムーブメントをおこしました。運動といたって何も大げさなことではなく、ぼくらが生きている世の中をちょっとでもマシな場所にしていこうとか、ぼくらの子ども世代が生きていくためのよい仕組みをつくらう、ということですから。そういうのをあきらめないと生活ができないというのとは変な話で、市民社会として失格なわけですよ。

——こういう運動にも、ビジネスとして成り立つためのノウハウが大事ですね。一方、ビジネスに



戸塚善了寺境内の「ぼちぼち農場」にて、住職やゼミ生とともに畑仕事(提供・ナマケモノ倶楽部)

表をつとめておられますね。なぜ「ナマケモノ」だったんでしょうか。

中南米で、ナマケモノの住む森がすごい勢いで伐採されているのを目の当たりにしました。ふつう動物たちは森から逃げ出すんですが、ナマケモノはのろくて逃げられない。人間につかまって食用にされるなど残酷な扱いを受けていました。それをどうにかしたいと、その生態について調べているうちに、その魅力のとりこになってしまったんです。

一般に流布している俗説「ドワイニズムという

ならない運動もされてますが。

「一〇〇万人のキャンドルナイト」のことですね。あれはブッシュ政権発足時の年頭教書を聞いてとんでもないと思つたからです。経済成長路線でどんどんエネルギーを消費するという話でしたからね。それに非暴力・無言の抵抗運動として、自主停電をやったんです。これが楽しかった(笑)。子どもの頃、停電ってわくわくしたじゃないですか。初めは抗議の意味だったのが、それ自体が楽しくなつて、だんだんと広まった。これまでの抵抗運動にはどこか禁欲的なところがあつたけど、自分が面白くない運動は、やはり他の人にも広まらない。自主停電では仲間たちと「これが世界中に広まってみんなで電気を消したら、地球の上に暗闇のウェーブがおこせるかもしれない」と面白がついていたら一〇〇万人どころじゃなく、もっとデカイ話になりました。

これからは 人類的なもの時代

ぼくは、経済成長主義は一種の狂気だと思っている。最近流行りの経済学など、実に単純で幼い発想に基づいています。損得勘定で動き、無限の欲求に突き動かされるのが人間の本性であるとか、自由な市場が最善を生むとか。そんなおそまつな「学」が独走するのを、しかし他の学問が易々と許してしまつた。でもそんな時代も終わりです。ぼくは、これからは人類的なものが戻ってくる、と信じている。例えば、経済史家ポランニーをはじめとする経済人類学が大きな役割を果たす時代だと思っています。

——こういうと夜を照らしてきた電気を一回消して

か、いわゆる弱肉強食の考え方がありますね。生存競争ではより速くより強く進化したものが生き残る。今の経済優先の社会もそれで動いているようなところがありますが。でもナマケモノはそれとは対極で、遅い方へと進化していった結果ちゃんと栄えている。

「より速く」の生き方を 変える

一九九九年、ナマケモノ倶楽部の発足にあつてこう宣言しました。「ソウを救えとかトラを救えという運動がよくあるが、我々のはそうじゃない。我々は、ナマケモノになるんだ！」と。環境破壊のほとんどは先進国に住む我々のライフスタイルのせいですから、それを変えることが第一です。森林破壊につながる鉱山開発や農地拡大などは、我々の超ファストな、かつての千倍とか万倍の速度をもつ生活を支えるため。だからこの生き方をスローダウンすることなしに、環境保全や自然保護なんてありえない。これがスローライフなんです。

——実際の活動はどんなものですか。

ナマケモノ倶楽部では、最初からビジネスと知的探求と運動との融合をめざしています。例えば、海外での森林保護運動などを支援するためフェアトレードで、森林農法による有機コーヒーの卸販売にも取り組んでいます。当時まだめづらしかったフェアトレードのコーヒーを広めるために、カフェをつくらうというアイデアが出て、二〇〇一年に東京国分寺に「カフェスロー」をつくりました。以来、フェアトレードやカフェづくりで若者が起業し運動に取り組みながら生計をたてられる



「電気を消してスローな夜を」と呼びかける「100万人のキャンドルナイト」。社さんが地元で始めたお寺からのムーブメント「カフェ・テラ・テラ」にて(提供・ナマケモノ倶楽部)

みる、キャンドルナイトのような行動が、人びとのなかにある何かを思い出させるかもしれません。経済優先のこの社会を支えてきたのは恐怖であり、現在の便利な生活を捨てて今さら暮らしができなくなるという思い込みです。この、一歩も戻れないという恐怖の元には、遅れた、未開の、野蛮なる自己を切り捨てることによって、やっと文明人になったという「自己否定」のトラウマがあるんじゃないかな。

——アマゾンの先住民社会では毎晩がキャンドルナイトのようなものでしたよ。電気がなくなつたつて、ちゃんと暮らしているという気づきは大きいですね。昔に戻るのではなく今の生活があるわけ



ですから。最新刊『しないこと——スローライフのために』で書かれたこともそれに通じますね。

「しないこと」の発想は、近代社会・文明社会の本質は「すること」の過剰にあるんじゃないかということなんです。グローバルズムとは世界を「すること」で覆い尽くすこと。すればするほどモノが満ちて、ゴミもCO2もあふれかえってしまっ人びとの毎日も「すること」ばかりで忙しくて窒息しそうですよ。みんな「すること」リストに追われている。そこで、その横に「しないこと」リ

ストを置いてみたらどうですか、という軽い提案だった。でもやってみると面白いことが見えてくるんです。「する」の反対って何だと思いませんか？

——「しない」でしようか。

「起きる」の反対は「起きない」だと思いますが、実は「寝ている」だと思います。つまり、「する」の反対は「居る」だと。ドゥーイングの反対はビーイング。人間はヒューマン・ビーイングだった筈なのに、すっかりヒューマン・ドゥーイングと化してしまっった。何のために「する」のか、もう誰にもわからない。かつては「居る」ためだったはずなのに、今や「する」のために「する」ために「する」……。いつまでたっても、「居る」時間がない。これをほくは「するする社会」と呼ぶんです。

「する」ことをちょっと休んで、ただ居てみる。普段見ていなかったいろんなものが見えてきますよ。スローダウンは実はホンモノの豊かさへの道筋なんです。『より速く、より多く』を合言葉に効率ばかりを求める人生なんてろくなモンじゃないでしょう。自分の過去を振り返ってみると脇道にそればかりで、道に迷うことも多々あったけど、近道を来なくてよかったとつくづく思います。

——寄り道したことで、辻さんのなかに豊かな発想がつけられたわけですね。著書にちりばめられた言葉の遊び感覚もいいたすね。

言葉遊びといえは、ほくは、片倉もとこ先生の「ゆとりぎ」が好きです。

——「ゆとり」と「くつろぎ」をあわせ、真ん中の「りくつ」を抜くという(笑)。イスラムの考えからきたものでしょうね。

イスラムのスロー思想、スローライフを見事に

体をあらわす「whole」からきている言葉だそうなんです。ヘルスにしてもヒーリングにしても対象にするのは、全体のバランスが欠けた状態であると。この考え方は、おそらくほとんどの文化の根底にある世界観だと思います。

——バランスを保つというのは、シャーマンの役割です。さまざまな手立てを講じては、アンバランスになった人間関係を取り戻すというように。辻さんのお仕事も、バランスを崩した社会に対するシャーマンなのかもしれませんね。

どっちかというトリックスターでしようね(笑)。海外から帰ってきて大学で教えるようになった当初は不向きかなと悩みました。でも今は、若い人たちと一緒にいろいろやるのがますます面白い。学者が不用意に「学生の劣化」などと言うのを聞くのが嫌いです。若者の感性は現代を越えて、来るべき社会を先取りし始めている。もちろんそれは、世界がそこまで追い詰められていることへの反動でもあるわけですが。

何かをやることで見えてくる

ほくは楽観的な人間ではないです。環境運動をやっていたら楽観的にはなれませんよ。けれど、悲観してもしようがないです。からね。あとはどんな若い人にまかせればいいんですよ。でも若者たちにしてみれば、新しい時代をつくるにも、その材料の



辻さんのゼミでは、年間を通して農作業実習がおこなわれる(提供・ナマケモノ倶楽部)

言いあらわしていると思います。こういう遊び心いいですね、「文明の衝突」なんていう乱暴な発想がまかり通るこんな時世に読むとほっとします。こういうことを考える人類学者がちゃんと居るってことを広めていくことが大事ですね。

——もうひとつの最新刊『スローメディスン』で対談された上野圭一さんは、民博で共同研究をしていたこともあるんです。

彼は翻訳家で代替医療のエキスパートですが、その仕事はすぐれて人類学的だと思っています。この本でもふれていますが、健康をあらわす「health」、癒しにあたる「healing」は、もとは全



最近のフィールドであるブータンにて。国王の提唱で、憲法に「GNP(国民総生産)」ならぬ「GNH(国民総幸福)」という考え方が明記された(提供・ナマケモノ倶楽部)

もちあわせが少ないんです。そこにほくたち上の世代の役割がある。過去をちょっと振り返ればいろんなヒントがあるし、ましてや、人類学は、新しい社会づくりに使える材料の宝庫です。

カフェなんか、とりあえず若者を手伝って一緒にやってみることで。動き出せば彼らはいろんなことに興味をもちますよ。フェアトレードは「顔の見える関係」だとすれば、「じゃあ会いに行ってみようか」となる。ミニ人類学が始まります。「フェア」という言葉も、考える入口としていいんです。昔ほくらが若い頃に使った「正義」だと、すぐ話がこじれるんだけど、「フェア」なら、文化相対主義という言葉を知らなくたって、どういう関係がフェアなんだらう、ここの人たちにとって何がフェアなのか、と若者は考えますから。

——若者をあしざまに言う論調があります。捨てるもんじゃありません。

うちのゼミは、しょっちゅう田んぼや畑に出る農的ゼミです。地下足袋が必需品という、なかなか大変なゼミなんです。そこで彼らのなかに何が起るかは、ほくにもよくわかりませんが、まあ、何か面白いことは起る。それがヒントになって、これからの生きる力になるんじゃないかなあ。その点、ほくはひどく楽観的なんです。

——以前とちがう自分を学生は発見するわけですか。見えないものが見えてくる、新しい輝きがあらわれるというところですね。本日は広がりのあるお話をお聞かせいただき、本当にありがとうございました。

水源を訪ね、異界を知る

三月二十五日(木)より開幕した民博の企画展「水の器 手のひらから地球まで」(一)六月三日(火)では、水と人の多様なかわりが四つのコーナーをつないで構成されている。各コーナーは「一・生活世界の身近な器」「二・多様な水源」「三・水の器・地球」「四・水のペットボトル」からなっているが、わたしはおもに二番目の「多様な水源」コーナーを担当した。

さまざまな水源

人びとは飲み水をどこから取っているのだろうか?この素朴な疑問から水源を求める作業は始まった。日本ではほとんどの人は水道栓をひねれば、飲み水を口にすることができ、スーパーやコンビニでペットボトルの水を求めることができる。現代人にとっての水源は水道栓であり、コンビニのペットボトルコーナーなのかもしれない。では、これらの水は



コンビニのペットボトルコーナー

どこから生活世界にもたらされてくるのだろうか。多くは貯水池、ダム湖、井戸などの大規模な水の器に溜められた地下水や雨水、河川の水などにたどりつく。湖沼の水や泉水、湧水も自然界にある貴重な水資源だった。

日本でも多くの地域で、わずか数十年前までは飲み水を始め、日常生活用水の多くを自然の水源に頼っていた。当時、人びとは飲み水を供



水道栓の水

給する水源までたどりつくことしかできなかった。その先(奥)は得体の知れない不明の異界だったのである。そのような環境のもと、人びとは、水の恵みをもたらす水源に畏敬を抱き、神話や伝承、儀礼を傳達させてきた。水源は人間にとって不可視の自然と現実の世界を結ぶ接点となっていた。異界と現実の世界とを結ぶ接点となる場所が、人びとが水を獲得する水源地だったといえる。



民家の井戸端。榎原市北越智町(2009年)

異界とつながるバリ島の湧水

このように水源地を介し、生活世界と異界との交流を実践する社会の一例をインドネシア、バリ島の人びとの信仰生活からかいま見ることとする。

バリ島は、美しい棚田が広がる田園風景が世界的にも有名で、ヒンドゥー教の信仰が今も息づく島としてもよく知られている。急斜面に畦



斜面に広がる棚田。インドネシアバリ島(1995年)

に湧水が出る。その湧水は人びとの飲み水や生活用水となるだけではなく、年に幾度とおこなわれる儀礼の聖水として欠かすことができない水でもある。聖水は大地から湧き出る清らかな水でないといけない。儀礼は日本でおこなわれていた若水汲みと同様に、この水を汲みに行くことから始まる。汲まれた水に司祭プダンダが呪文を吹き込むことで、神聖な水アムルタとなる。プダンダはこの水を神に捧げ、一人一人の頭上にしぶきを飛ばして儀礼に参加した人びとの邪気を払い、浄化する。なかにはその水を手のひらに受けて口に含んだりする人もいる。こうして儀礼は粛々と進められる。バリ・ヒンドゥーが水の宗教ともいわれるゆえんがこんなところにある。

バリ島の人びとによる湧水との接し方を見ていると、異界と生活世界とが混然としているように思われる。水源となる湧水地(池)に存在するはずの異界の出入り口で取水した水に聖性を蓄えたまま、自分たちの生活世界にもち帰り、異界のパワーを



湧水の取水場。バケツに水を受ける。インドネシアバリ島(1989年)



器に入った聖水「アムルタ」を指で弾いて神に捧げる。インドネシアバリ島(1989年)

を作り段差を付けて棚田とすることで、保水力を高め、雨水が一気に流れ落ちずに地下に浸透しながら、高い所からだんだんと下に流れるようにした灌漑技術はお見事という他はない。水がゆっくりと地下に浸透することで、地割れや地滑りを防ぐこともできる。そして、田植えから収穫まで稲作全体が彼らの信仰体系に組み込まれ、水がじっくりと浸透するようにゆったりとした時間が流れている。

バリ島の地面に吸収された雨水は地下水として脈々と流れ、島の随所

よしだ ひろひこ
吉田裕彦
天理大学附属天理参考館学芸員
自称、展示サービス業。近年、文化人類学ネタをパツクに「火のめぐみ」、「モチコメの国ラオス」(天理参考館企画展)、「モン・スー・アジアの竹文化」(天理ギャラリー展)などを共同企画、開催する。

人と水をつなぐバーチャルミュージアム

人びとの暮らしに深くかかわりをもってきた水。古くから「水の都」と称されてきた愛媛県西条市では、行政が主体となり、人と水の関係の過去と現在を検証し、未来を問い直す新たな取組みが実施されている

愛媛県西条市は、古くから「水の都」と称され、地下水が人びとの生活や農業・地場産業と深くかかわりあってきた。

この地下水は、地中に鉄管を打ち込めば湧き出ることから「うちぬき」といわれ、各世帯の生活用水を支える貴重な水源として市民に親しまれるとともに、市民共有の財産として守られてきたものである。また、西条市が進める独自のまちづくりを支える資源として存分に活用されてきた。まさに天恵の資源である。



総合文化会館西側水汲み場

「水の歴史館」を開設するまで

西条市における人と水の緊密な関係について、過去と現在を検証することにより未来につなげていくことが行政の責務であると認識し、人と水との総合的な研究の場としてバーチャルミュージアム「水の歴史館」の開設を進めた。

開設にあたっては、①人と水②環境と水③産業と水の関係の三点を基本理念とし、西条市の水に対する思いが市内外に情報発信できる館運営を目指すことになった。

予算の裏付けはなく、その分知恵を絞って展示内容を自前で調製する作業は、想定外の枠をはるかに超える難事業となった。

しかし、この作業により開設に携わった職員が、水に対する思いを篤くしたことは想定外の副産物であった。

おもな展示内容は次のとおりである。

- ・水の歴史（うちぬき工事の今昔／井戸と井戸掘りの変遷／川の歴史等）

佐々木 和乙
西条市役所生活環境部 部長

市独自で地下水資源調査解析事業をおこない、地下水を「公水」として位置づけ、「水は売らない」をキャッチフレーズに、地下水を活用したまちづくりを進めている。

- ・西条市水の資料館（地下水の自噴のしくみ／水質および水位調査の結果等）
- ・水辺の生き物（カブトガニ情報等）
- ・水のエッセイ（西条の水にまつわるお話し）
- ・西条市の水収支
- ・水のふしぎ
- ・それゆけ突撃インタビュー

現状と課題

入館者、すなわちこのサイトにアクセスした人数は、二〇〇六年六月開館以降、二〇〇九年二月までで約二万九〇〇〇人である。

現在は、展示内容（データ）の更新がおもな作業となっているが、市外の方からは「うちぬき」を訪ねるための情報提供を求められることがしばしばあり、展示内容の工夫が必要であると考えている。

また、市民からは水に関する歴史についての内容の充実を求められて

うちぬき広場



おり、市民の水に対する思いの強さを今更ながら痛感している。

現在西条市は、大学や専門機関と連携して、市内全域における地下水の調査解析をおこなうとともに、研究者の参画を促して「地下水法システム研究会」を立ち上げ、地下水を「公水」と位置づけた保全策の立案・研究を実施している。おりしも

国においては「水循環基本法」（仮称）の制定を検討しているところであり、ときを同じく同事業について政策研究がおこなわれていることが不思議に感じられる。

今後は、これらの内容についてもコーナーを設け、情報発信をしたいと考えている。

なお、展示の一部は、民博で開催中の企画展「水の器」でご覧いただける。ウェブのURLは <http://www.city.saijo.ehime.jp/mizunorekishikan/index.htm>



水と親しむ青空教室

表紙モノ語り

先住民の思いを刻むトーテムポール

作者：ノーマン・テイト 民族：ニスガ
国名：カナダ 1977年受入
標本番号：H0009192

岸上 伸啓

民博 先端人類科学研究部

カナダ・イヌイットを中心に北方先住民文化の研究をはじめて25年。現在は、アラスカのイヌピアックの捕鯨文化を研究中。

アメリカのアラスカ東南部からワシントン州にかけての太平洋沿岸は、比較的暖かく多雨で森林資源と水産資源に恵まれている。この地域の住人は北から南まで文化が似ているため北西海岸先住民と一括されるが、その実態は言語を異にするトリンキットやハイダなど二〇以上の民族集団に分かれている。これらの民族集団に共通してみられる文化的特徴のひとつに、トーテムポール（巨木柱、以下、ポール）がある。ポールの素材はレッド・シダーで、ワタリガラスやワシなど特定の氏族に属する動物が、氏族の歴史として独特の形態で彫りこまれている。表紙のポールはニスガのもので、上から巨人カエル、ワタリガラスが彫られている。

三メートル以上もあるが、一八世紀にこの地を訪れたヨーロッパ人は小さなポールしか目にしていない。じつは、ポールは、ラッコの毛皮交易の結果巨大化したのである。この地域に生息するラッコの毛皮が、一七七九年に中国の広東においておどろくほどの高値で売られたので、欧米人はその毛皮を求めて北西海岸にやってきた。この毛皮交易は北西海岸先住民に巨万の富をもたらした。儀式活動を盛んにさせた。また、外来の鉄器の利用によって巨大なポールが製作されるようになった。

リスト教的な儀式活動を社会悪とみたカナダ政府は、それを一八八四年から一九五一年まで禁止した。その期間、儀式は表立っては実施されず、ポール作りも低迷した。しかし一九五〇年代からその製作が、儀式とともに復活し、今でも祖先を記念するためにポールが建立され、儀式が実施されている。ポールには先住民の思いが彫りこまれている。



企画展

「水の器—手のひらから地球まで」

会期 六月二日(火)まで
会場 本館展示内

■関連イベント
「水の器」プログラムWET」
実施日 ①五月三日(月・祝)
②五月四日(火・祝)

時間 一三時三〇分～一五時三〇分
会場 第五セミナー室
定員 各回二〇組(要申込)
実費 五〇〇円

参加申し込み方法
タイトル・実施日・参加人数・参加者氏名・年齢・住所・代表者の電話番号とFAX番号を書いて左記までお申し込みください。対象は小学生です。申し込み締め切り
四月三日(金)

E-mail: workshop@idc.ninpaku.ac.jp
FAX 〇六六八七八七五三
関連イベントのお問い合わせ
情報企画課情報企画係
電話 〇六六八七八八五三三
(平日九時～一七時)

◆「伊勢の染型紙—映像と実物にみる匠の技—」
会期 六月二九日(火)まで
会場 本館展示内
※研究者によるギャラリートークをおこないます。
日時 四月六日(火)
一四時三〇分～一五時三〇分

◆研究公演
「日本に舞う中国の龍と獅子—チャイナタウンに見る文化の継承と伝播」
実施日 四月一八日(日)
時間 一三時三〇分～一五時三〇分

会場 本館一階エントランス・正面玄関(屋外)
※参加無料・申込不要

◆研究公演
「狂言を知る—観る楽しさと演じる喜び」
実施日 五月九日(日)
時間 一三時三〇分～一五時三〇分(開場一三時)
会場 講堂
定員 四五〇名
※参加無料・申込不要

●みんなく映画会
「民族学者とヒマラヤ、南極」
①「マナスルに立つ」
実施日 四月二四日(土)
時間 一三時三〇分～一六時(開場一三時)
②「カラコルム」
実施日 五月一日(土)
時間 一三時三〇分～一五時五〇分(開場一三時)

会場 本館一階エントランス・正面玄関(屋外)
※参加無料・申込不要

◆研究公演
「狂言を知る—観る楽しさと演じる喜び」
実施日 五月九日(日)
時間 一三時三〇分～一五時三〇分(開場一三時)
会場 講堂
定員 四五〇名
※参加無料・申込不要

●みんなく映画会
「民族学者とヒマラヤ、南極」
①「マナスルに立つ」
実施日 四月二四日(土)
時間 一三時三〇分～一六時(開場一三時)
②「カラコルム」
実施日 五月一日(土)
時間 一三時三〇分～一五時五〇分(開場一三時)

③「花嫁の峰チヨリザ」
実施日 五月八日(土)
時間 一三時三〇分～一五時五〇分(開場一三時)
会場 講堂
定員 四五〇名
※参加無料・申込不要
研究公演・映画会のお問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話 〇六六八七八八二〇
(平日九時～一七時)

※参加無料・要事前申込
お問い合わせ
広報企画室広報係
電話 〇六六八七八八五六〇
(平日九時～一七時)

●音楽展示・言語展示があったらしくなりました。
●無料観覧日・休館日変更のお知らせ
五月五日(水・祝) ことものは、本館展示を無料で観覧いただけます。ただし、自然公園を通行される場合は、入園料が必要です。
また、五月五日(水・祝)は、祝日のため開館し、翌六日(木)を休館します。
*詳細については、みんなくホームページをご覧ください。

刊行物紹介

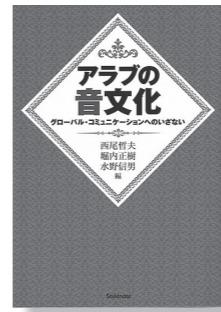
■林勲男 著
『自然災害と復興支援』
みんなく実践人類学シリーズ9
明石書店 定価:7,560円(税込)

2004年暮れに発生し、人類史に残る甚大な被害をもたらしたインド洋地震津波災害被災地の復興支援について、スリランカ・インド・タイ・インドネシアでの現地調査に基づき分析する。



■西尾哲夫・堀内正樹・水野信男 編著
『アラブの音文化—グローバル・コミュニケーションへのいざない』
スタイルノート 定価:2,100円(税込)

音文化という考え方によって、音が作り出すコミュニケーションを「音楽」という狭い枠から解放し、アラブ世界の文化をグローバル・コミュニケーションという独自の視点に立って考察する。



■大貫良夫・加藤泰建・関雄二 編
『古代アンデス 神殿から始まる文明』
朝日新聞出版 定価:1,470円(税込)

日本のアンデス考古学調査は、50年以上にわたり継続してきた。2008年、東京で開催された50周年記念シンポジウムとともに、調査の足跡と、現在進行形の発掘に関する最新の成果が盛り込まれている。



みんなくゼミナール

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13:30~15:00(13:00開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料

展示場をご覧になる方は、観覧料が必要です。

第383回 4月17日(土)
[新言語展示関連]
ことばの宇宙を届けたい
—新しい言語展示の表話・裏話
講師 菊澤律子(先端人類科学研究部准教授)
1人でも多くの人にことばの世界の楽しさを伝えたい。できるだけ多くの人に世界のことばのことを知って欲しい。そんな民博の言語学者の思いが2010年3月末、「言語展示」という形になります。展示の設計のプロセスや装置開発に関するエピソードを、展示場に入りきらなかったことばのおはなしと一緒に紹介します。



第384回 5月15日(土)
[新言語展示関連]
世界のことは—語順と系統
講師 長野泰彦(民族文化研究部教授)
新しい言語展示では、3000とも4000とも言われる世界の言語の多様性を示すとともに、語順等に観察される普遍性を浮き彫りにします。また、諸言語の歴史関係を大胆に鳥瞰できる図も作成しました。これらをどのように利用していただけるか、日本語は世界の中でどういった位置づけになるのかにも触れます。



友の会

友の会講演会(大阪)
会場●国立民族学博物館
第5セミナー室
定員●96名(当日先着順、会員証をご提示ください)

第383回 5月1日(土)
時間●14:00~15:30(13:30開場)
一つの列島、二つの国家、三つの文化
講師 佐々木利和
(北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授)
日本は単一民族国家であるという認識がひろくみられますが、本当にそうでしょうか。歴史的に考えてみると琉球、アイヌの人びとはそれぞれ固有の言語や文化、社会を維持してきました。日本という国のなかで、琉球、アイヌの文化は今後、どうやってゆくのでしょうか。

第384回 6月5日(土)
時間●14:00~15:30(13:30開場)
文明の融合都市、イスタンブールのゆくえ
講師 新免光比呂(民族文化研究部准教授)

東京講演会
会場●JICA地球ひろば
セミナールーム301
定員●60名(申込制、下記「友の会」まで)

第92回 4月10日(土)
時間●14:00~15:30(13:30開場)
文化人類学に生きる
—館長就任1周年を迎えて—
講師 須藤健一(館長)

第93回 5月22日(土)
時間●14:00~15:30(13:30開場)
東北アジアのシルクロード
—人びとをつなぐ河の道
講師 佐々木史郎(研究戦略センター教授)
※3月号のタイトルが「東アジア」となっておりました。訂正しおわびします。

国立民族学博物館友の会
電話 06-6877-8893
ファックス 06-6878-3716
電話でのお問い合わせは
月曜~金曜日9時から17時までをお願いします。
<http://www.senri-f.or.jp/>
E-mail
minpakutomo@senri-f.or.jp

ミュージアム・ショップ

現在開催中の企画展にあわせ、ミュージアム・ショップでは関連商品を取りそろえております。生命の根源「水」にまつわる企画展「水の器—手のひらから地球まで」からは、展示をより一層親しんでいただくための解説書を。

また、企画展「伊勢の染型紙—映像と実物にみる匠の技—」からは、日本伝統の技がいきる染型紙にちなんだ数々の商品を準備し、皆様のご来店をおまちしております。



企画展解説書「水の器—手のひらから地球まで」
編集:田口理恵・久保正敏・秋道智彌
発行:大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
定価:500円(友の会会員価格:450円)
発送手数料:400円

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ
電話 06-6876-3112
ファックス 06-6876-0875
水曜日定休
ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
<http://www.senri-f.or.jp/shop/>
E-mail shop@senri-f.or.jp

湾岸ワンダーランド アブダビのアラビアンナイト国際会議に参加して

昨年末、初めてペルシア湾の南側の国を訪れる機会があった。

二〇〇九年一月一五日から一七日にニューヨーク大学アブダビ校で開かれた国際会議「アラビアンナイト——文学と芸術における遭遇と翻訳」に招待されたのだ。大阪の自宅から関西空港までの車の手配あり、フライトはビジネスかファーストクラス、滞在は四つ星の高層ホテル、三食すべて主催者もちといった要人待遇で、まるで「空飛ぶ赤じゅうたん」がお迎えにきたようだった。

しかし何もわたしの業績がノーベル賞級だからというわけではない。イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ、エジプト、チュニジア、インドなどから呼ばれた四〇人以上の参加者たちが、みな同じ待遇で招待されていたのである。その顔ぶれは、アラビアンナイト界の大御所から、

まだ博士論文執筆
筆中という若手のアメリカ人大学院生まで幅広く、また、学者だけでなく、作家、演出家、映画監督、ジャーナリストと



アブダビのスカイライン

いった異分野の専門家も招来されていた。

●巨額の国家予算と文化政策

ニューヨーク大学アブダビ校は、二〇一〇年秋に正式に開講する予定のできたてほやほやの大学である。国際的なネットワーク大学を目指すニューヨーク大学と米国式の研究教育機関を地元に見るアブダビの首長国が提携して設立されたもので、今回のアラビアンナイト会議は、ダウンタウン・キャンパスで初めて開かれた国際的な集会所らしい。二〇一四年頃には、アブダビ沖合に建設中のサアディヤト（幸福）島にメインキャンパスを移転するという。

話はそれだが、このサアディヤト島がまた、巨額の国家予算がつぎ込まれている驚愕の巨大プロジェクトである。無人島を文化の島にしてしまおうと、フランスのルーブル美術館やアメリカのグッゲンハイム美術館の分館、海洋博物館、歴史博物館、劇場などの設計を安藤忠雄を含めた世界中の著名な建築家に依頼している。今の日本は「マンガの殿堂」とつづけることすらかなわないが、島ごと文化施設にしまおうというアブダビでは、ナイアガラ滝のごとく、お金が轟音をたてて流れて

●国際会議での発表

「わたしをこの壇上に立たせるために投入された費用がおよそ……、そしてそれを発表時間の二〇分で割ると二分あたり……」などとコストパフォーマンスのことを考えると、発表にも気合が入った。わたしは「日本の古典芸能になったアラビアンナイト」という発表で、狂言や歌舞伎に翻案された千一夜の話や、二〇〇四年の特別展「アラビアンナイト大博覧会」の際に制作した講談や落語バージョンの語りやの映像を紹介した。同じく民博から参加した西尾哲夫教授は同じパネルで「宝塚歌劇におけるアラビアン・ファンタジー」について発表された。極東の日本の舞台芸術における千一夜の受容には、欧米・アラブの参加者がみな大変関心をもってくれた。イギリスの演出家は、「アラビアンナイトの語り違和感なく再現できる伝統的な芸芸があることはすばらしい」と言ってくれた。

「ぜひまた呼んでほしい」と言い残し、空とぶ赤じゅうたんにまた乗って帰ってきた。



巨大なシャイフ・ザイヤド・モスク



やまなか ゆりこ
山中由里子
民博 民族文化研究部

専門は比較文学比較文化。アレクサンドロス大王の死後に彼にまつわるさまざまな言説が、古代ギリシア・ローマ世界からイスラーム世界へどのように伝わり、展開したかを研究している。「アレクサンドロス変相——古代から中世イスラームへ」(名古屋大学出版会、二〇〇九年)

ムービング・イメージ、それは誰の視線によるものなのか？

●ムービング・イメージに囲まれた暮らし

今、わたしたちは映像文化のなかで生活を送っている。電車、飛行機、街頭のディスプレイで、あるいは、家庭のテレビやインターネットを通じてコンピュータで映像を日常的に見ることができている。YouTube (二〇〇五年)、ニコニコ動画 (二〇〇七年) などのインターネット上の動画共有サイトでは、豊富な映像コンテンツを視聴することができる。さらに、携帯電話やデジタルオーディオプレイヤーなどで映像を携帯することもできる。内容の質はともかくとして、映像それ自体の量は多くなっている。また、視聴者は機器や場所を問わず、見方の選択の幅も広げることができるようになった。

写真などの静止画像と対比して、映画、テレビ、ビデオ、コンピュータ上の動画像などは、ムービング・イメージと総称することができるだろう。わたしたちは、ムービング・イメージに囲まれ、それらを介し、想像力を働かせることで、現実

を経験、もしくは構築するといっても過言ではない。

●誰の視線によるものなのか？

こうした背景のもと、人文・社会科学におけるムービング・イメージの利用もさまざまな形で盛んになっている。批評だけでなく、撮影、編集、制作、あるいは、デジタルアーカイブズの構築などを自らおこなう研究者も増えている。

人類学には、古くから他者の生活や活動を映像で記録し、表象の可能性をさぐる研究領域があり、民族誌映画が制作されてきた。現在、研究者がフィールドワークの際にビデオカメラを携帯して、研究のための調査資料の収集をおこなうということ、は、特別なことではない。また、研究成果として映像作品の制作がおこなわれ、近年では、学会などで上映会が設けられることもある。

筆者は、これまでおもに日本の酒蔵にてフィールドワークを展開してきた。最近、フィールドへ行く際には、小型のデジタルビデオカメラを携帯する機会が多い。撮影した酒蔵内の映像を、分析のための資料とし

て、また、編集し、授業の教材として活用するが、撮影する際、常に意識せざるをえないことは、撮影する主体と撮影される主体との関係である。

何を対象とするにしても、撮影対象は単純に客観的な対象ではありえない。そうであるならば、映像が誰の視線によって撮影されたものであるのかを考える必要があるだろう。映像に客観的事実を求めるならば、そのとき、撮る主体と撮られる主体とが断絶した表現が好まれるのかもしれない。しかし、映像はなんらかの経緯を経て、構築されてきたものであることを考えれば、制作の意図やプロセスなどを、場合によっては、映像のなかに提示することによって、あらたな形の映像を作ることができのではないだろうか。ムービング・イメージの時代に求められているものはそういう映像なのかもしれない。



フィールド先である酒蔵の全景(兵庫県明石市にある茨木酒造)

いわたに ひろふみ
岩谷洋史
民博 機関研究員

専門は文化人類学。おもに、日本の酒蔵(清酒業)を対象にフィールドワークをおこない、仕事場で働く人たちの知識や技能、徒弟制に関する研究をおこなってきた。最近、映像やコンピュータを利用した研究のあり方にも関心をもっている。

多文化を	ささえ	人びと
ささえ	える	

「チョーデー」ってどんなところ?!

東京にある朝鮮大学校スケッチ

「チョーデー（朝大）」と聞いてわかる人はまずいまい。東京都小平市にある朝鮮大学校（チヨソンデハッキョ）の略称である。ここでは、日本社会にほとんど知られていない朝鮮大学校とそこに暮らす学生たちの生活をわたし自身の体験をもとに簡単に紹介したい。

している。

晴れた日、寮の屋上から見えた富士山の美しきことよ!

朝大生の一日

午前七時一〇分、学部ごとに集まってるの体操で一日がはじまる。その後、食堂にて朝食があり、学部の学科ごとの朝の集いが続く。八時五〇分、授業開始。講義はもちろん朝鮮語である。一授業八〇分で休み時間は一〇分、昼食はめいめい授業の合間に行く。ポリウムが半端ではない。巨大なボールに入ったご飯とキムチと納豆はお替り自由。ホルモン煮込みはじつにマシッソヨ（おいしい）! 二時過ぎから始まる午後の授業は睡魔との戦いだ。授業が終われば自由時間で外出もOK。バイトに行く者、遊びに行く者、部活に打ち込む者、フットサルに興じる



関東の大学では強豪として有名な朝鮮大学校サッカー部(提供・陳天璽)

者もいる。当時、コインシャワーは女子専用、羨ましかった。食後は自室の掃除。わたしの部屋は二段ベッドの六人部屋だった。その後、一〇時三〇分まで自習時間。部屋に沈黙が流れる。それが終わると一日のしめの集いがあり、その後は自由時間である。寝ようが友だちと遊ぼうが恋人と会おうが個人の勝手。構内の公衆電話に毎晩長蛇の列をなしていたのも今はむかし。

朝大の一年

入学式・始業式は毎年四月一日である。五月下旬に体育祭があり、目玉の「棒倒し」は「喧嘩祭り」どころではない。夏休みは七月末から九月初めまでで日本の大学と変わらない。一〇月に前期試験と学園祭があり、一月末には学科別研究討論会がある。朝大生と日本の大学に通う朝鮮人学生ら



正門から見える講義棟は1959年に建設

が一堂に会しての学術大会である。同時に夜を徹しての「朝まで討論会」。コーヒーを飲みすぎて寝付けなくなる。そして冬休み、一月中旬に成人式、二月に後期試験があり、三月一〇日の卒業式とその後の終業式で一年が終わる。そのほか、朝鮮学校や朝鮮新報社を初めとした在日朝鮮人総聯合会（略称 総聯）傘下の機関での実習や学部ごとの研修、そして、朝鮮民主主義人民共和国（以下 朝鮮）での祖国研修もある。ピョンヤンの町で道行く人たちから、現地の方言

で「ベツシナ?（いま何時?）」と声をかけられたのが懐かしい。朝大、ちょっと硬いおはなし

朝鮮大学校は総聯傘下の大学である。朝大のほかには日本各地に朝鮮学校があり、幼稚園に当たる幼稚班、小学校に当たる初級学校、中学校に当たる中級学校、高等学校に当たる高級学校など、六九校にも上る。その頂点にあるのが朝鮮大学校だ。

朝大は一九五六年四月に設立され、朝鮮政府からの教育援助費をもとに教職員・学生・朝鮮人有志らが工具を手に朝大を建設した。朝大の教員らは朝鮮国家科学院などの論文審査をパスして学位をもっており、朝鮮政府は朝大を朝鮮国内の大学と同様に扱っている。

朝大は教育目標として、「在日朝鮮人の生活と権利を守る」とともに、分断された祖国の統一と繁栄に寄与する人材を育成すること」を掲げており、卒業生には、朝鮮学校の教員や総聯の活動家、総聯系商工団体の職員や朝鮮人企業に携わる人も多い。近年は、ノン



祖国研修のとき、ピョンヤンの学生少年宮で見た朝鮮の子どもの公演

（コー・チャニユ）氏や映画プロデューサーの李鳳宇（リ・ボンウ）氏、Jリーガーの鄭大世（チョン・デセ）氏をはじめ、従来とは別の世界に活動の場を求める人も増えている。

ところで、朝大が直面している問題に学生数の減少が挙げられよう。わたしの在学中は約一五〇〇名いた学生が現在約一〇〇〇名。少子化、日本の大学への進学者の増加などが背景にあるようだ。近年、日本の大学が朝鮮高校卒業生



筆者が教育実習で担当した朝鮮学校の子どものたち

の受け入れ要件を緩和したことも影響している。「朝鮮人だから」という義務感から朝大を選ぶ時代ではなくなったといえよう。これからは、朝大が「魅力ある大学・学びたいことが学べる大学」と評価されるような、特色を生かした「ブランド作り」が必要なのかもしれない。朝大のもつ人材と資源を活用すれば、たとえば朝大が在外朝鮮人研究の世界的な拠点となることも夢ではなからう。「在日同胞社会の朝大」から「世界の朝大」への変身を願ってやまない。



朝鮮語学のテキストのひとつ『語文学資料集』

春の訪れを告げる はえ縄漁 〈カルーガ〉

先住民族ニヴフの春はカルーガ漁で始まった。150年前まではアムール川ではどこでも捕れる魚だったカルーガも、今は乱獲と環境汚染で数を減らして、絶滅危惧種に指定されている。ニヴフの名物料理だったカルーガの刺身も幻になりつつある



カルーガ(提供: 標準サーモン科学館)

春を告げるカルーガ漁

四月に入るとさすがにアムール川の河口周辺にも春が訪れる。川面に張った厚い氷がゆるみ、水面が顔をのぞかせるようになる。ただ、川の水がすっかり姿を消すのは五月である。水が温み、天井がなくなつた川のなかを魚たちが活発に泳ぎ回る。ニヴフの漁師たちが舟に乗って本格的な川漁に乗り出すのはそのような季節である。

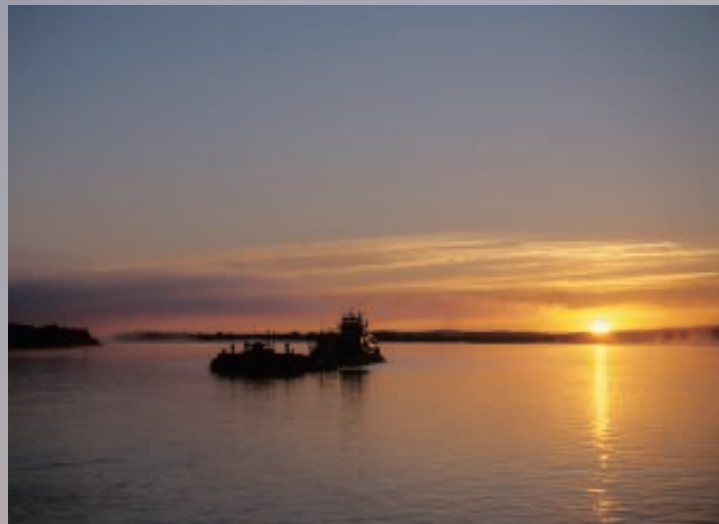
ザメが多数生息していた。カルーガ(ダウリヤチョウザメ)とよばれる種類である。体長は大きいものでは五メートルを超える。一九世紀後半に多数の移民が入植して以来、キャビアを目的に乱獲されたために現在は絶滅危惧の状態にあり、特殊な免許を取得しないと合法的には捕獲できない。ソ連時代には先住民族のニヴフたちに特別な漁獲の割り当てがあつたが、ソ連崩壊後は免許取得に必要な費用が高騰して、彼らの多くは事実上捕獲できなくなつてしまつ

カルーガのはえ縄漁

この大型の魚は網や釣りでは捕れない。ニヴフたちは特殊なはえ縄を使った。長い丈夫な縄にひもで長さ一〇センチメートルほどの太い釣り針を何本も結びつけ、その釣り針に軽い木で作つた浮きをつけ、川底に沈める。川底近くでは浮きの力で釣



かつてカルーガ漁に使われていたのはえ縄とその針



り針がもち上がり、水の流れて乗ってゆらゆらと揺れる。カルーガは好奇心が強い魚で、揺れる浮きに気づくと寄つてきて浮きと戯れるという。そのうちに針が胴体の一部に刺さり、その場から逃れられなくなる。漁師は定期的に見回つてきて、針が刺さつてもがいているカルーガを見つけたら、鉤でもち上げて、頭を棍棒で殴つて気絶させて捕らえた。ボートの上に引き上げられないような大物の場合には絶命させず、気絶させたまま、ボートの側舷に縛り付けて



カルーガの肉のかたまり

村まで運んだという。まるでヘミングウェイの『老人と海』のような話である。

ウ オツカによく合う カルーガ料理

ニヴフにとってカルーガの肉はこちそうである。彼らがつとも好む食べ方は「タルク」とよばれる料理である。チョウザメの生の肉のかたまりをとにかく細く千切りにする。それをギョウジャンニンニクやノビルのような香りの強い野草を刻んだものと和え、塩とコショウあるいは辛みのある野草で味付けして食べる。つまり日本のアジやサンマのたたきと同じような料理だった。今でもカルーガの肉が手に入るとこの料理を作る。ただし、和える野菜はタマネ



カルーガの肉を千切りにする



カルーガの千切り料理「タルク」

ギやニンニク、青ネギに変わっている。生のチョウザメの肉は基本的に白身魚の刺身と同じだが、噛むほどに味がしみ出てくる。また、肉のあいだに挟まる軟骨がこりこりとして、ほどよい歯ごたえがある。日本人の我々には醤油とわさびがほしいところである。この料理はいつもウオツカと一緒に出される。両者がじつによく合うので、ついつい飲み過ぎてしまふ。しかし、今やこのニヴフの名物料理も幻となりつつある。

カルーガ(ダウリヤチョウザメ)

Huso dauricus

アムール川に生息するチョウザメの一種で、この川に生息する魚のなかでは最大である。成長すると長さ3~5メートルに達し、体重も300キログラムにもなるが、漁獲されるのは100キログラムまでのものが多い。肉食で、幼魚のころは小魚を食するが、成長するとサケ・マスを好んで食べる。産卵は春が多く、産卵地はアムール川全域に広がる。カルーガからもキャビアは取れるが、アムール川の先住民たちはもっぱら肉と背中の軟骨を取るために捕獲した。現在は絶滅危惧種としてレッドデータに登録されているが、長年の保護政策の結果、増加に転じているという説もある。

佐々木史郎
民博 研究戦略センター
ロシア極東地域とシベリアをフィールドにして、先住民族の近現代史をおもな研究テーマとしている。近年は森林開発と先住民族の伝統文化振興活動との関係に関心をもっている。



歳時 世相篇

25

聖週間とは

キリスト教におけるもっとも重要な祭礼のひとつとして、イエス・キリストの復活を祝う復活祭(イースター)がある。その復活祭直前の一週間を聖週間とよび、キリスト教圏では新約聖書の福音書にしろされたイエス・キリストのエルサレム入城から最期の晩餐を経て、磔刑、そして三日目の復活までを再現する祭りが執りおこなわれる。また聖週間を準備すべく、復活祭前の四〇日間(四旬節)は、伝統的に食事の節制と祝宴が自粛される。それだけに、蓄積されたエネルギーは、聖週間や復活祭のときに爆発し、華麗な祭礼が催されるのである。復活祭は、春分の後の最初の満月が出現する日の次の日曜日とされているため、年によって日付が変わる。ちなみに二〇

セマーナ・サンタ 聖週間だ、盗掘へ行こう!



南米ペルーでは、スペインによる征服以来、人びとの暮らしのなかにキリスト教が浸透し、聖週間などの祝祭も華麗におこなわれるようになった。しかし、他のキリスト教国ではみかけられない、ペルーならではの光景が存在する。遺跡の盗掘である。聖なる日に、何故人びとは自分たちの祖先が築いた栄光の証であるはずの遺跡に盗みにはいるのか。そこにはキリスト教の布教過程が大きな影を落としている

盗掘なら聖週間

しかし、ペルーでは華麗な祭礼と同時に、セマーナ・サンタならではの習慣がある。盗掘である。セマーナ・サンタの一週間のなかでも、特にイエス・キリストの受難の日にあたる金曜日(ビエルネス・サント)に、人びとは近所の遺跡に出かけていき、スコップを使ってせっせとお

か、身につけるといふ。災禍から免れる、幸運をもたらすと信じられているからである。

現在では盗掘は違法だとわかっている人が大半なので、インタビュにも苦労した。わたしの最大の関心は、セマーナ・サンタになぜ盗掘をおこなうのか、という点にあった。

これには、キリストの死に際し、遺跡など霊的存在が宿る場所の口が開くなどして埋もれた宝が取りやすい状況になるからだという答えが返ってきた。とくに北海岸では、遺跡に宿る霊は邪悪な存在として、人びとに不幸や病気をもたらすと信じられており、近づくことさえいやがる人もいる。霊力が弱くなれば、盗掘もしやすくなると考えるのは当然である。

キリスト教の布教が盗掘を呼び起こした

ここに見られる自分たちの祖先が築いた栄光の文明の証であるはずの遺跡に対する否定的なイメージは、キリスト教の布教過程で、征服前の宗教や宗教施設を異教のシンボルとして徹底的に弾圧していったことから生じたものである。征服後、四六〇年も経てば、善なるイエス・キリストと邪悪な遺跡の霊という対立が受け入れられたとしてもおかしくない。だから否定的な意味が付与さ

関雄二

民博 研究戦略センター

一九七九年以来、南米ペルー北高地において神殿の発掘調査をおこない、アンデス文明の成立と変容の解明に取り組む。また、文化遺産をめぐる社会問題にも取り組み、遺跡博物館を核とする村落調査を進める。昨夏、現地の大学と共同で調査を進めるパコバンバという神殿遺跡で黄金製器を副葬した墓を見つけ、アンデスの卑弥呼として日本で報道された。

宝を探すのである。ペルーは、古代アンデス文明の成立した場所であるから、遺跡ならばいくらかもある。

今から一八年ほど前、実際に聖週間の金曜日に盗掘の実態調査をペルー北海岸で実施したことがある。アンデス文明と聞けばインカ帝国やマチュ・ピチュの石造神殿が思い起こされるが、ペルーの海岸地帯では、沖合を流れる寒流の影響で雨が降らないため、砂漠が広がり、そこに、焼いていない日干しレンガを積み上げたピラミッド型神殿や都市が築かれた。こうした遺跡に眠る金製品や土器などをねらって盗掘者が押し寄せるため、地平線の彼方まで盗掘の穴が連続しているところも少なくない。

調査を実施したペルー北海岸の一県だけでも、文化庁地方支局と警察との合同取り締まりにより、八〇名の盗掘者が逮捕された。あくまで氷山の一角である。一般に盗掘によって何かを見つけると、家に保管する

れた対象を壊したとしても罪悪感はないのである。

もちろん盗掘はセマーナ・サンタに限らない。遺跡の霊さえ押さえれば、遺跡に近づくことはできるからだ。一時的な現金収入を企む盗掘者のなかには、遺跡の霊を操ることができる呪術者に邪悪な霊から身を守る儀礼を依頼する者もいる。また見つけたお宝のうち、呪術師には呪具となるようなものを渡すという。盗掘者と呪術師とのあいだに成立する見事な補完関係である。

ここまできると、遺跡の保護が難しいことに気づくであろう。キリスト教暦と結びついた盗掘にせよ、商業的性格の強い盗掘にせよ、公共の宝の破壊として糾弾するペルーの文化財関係者の主張は、同じような文化財を調査してきたわたしとして十分に理解できるし、共感もする。しかしこうしたことばに空しさを感じてしまうのも事実である。なぜなら文化財や文化遺産という概念やその保護政策は、近代西洋社会の産みだした産物であり、その当の近代西洋を支え、密接に関係してきたキリスト教が、植民地ペルーに浸透し、土着の信仰を変貌させ、やがて皮肉なことに盗掘などの遺跡破壊に従事する人びとの精神世界を支える原理を作り上げることに加担していったのだから。

入試合格者を輩出させる水流

人と水のかかわり方は世界各地で多様である。

東アジアに流布する風水思想においては、水は人びとに吉凶禍福をもたらすものとして意味づけられている。中国の少数民族トン族による風水実践の事例から人と水のかかわりを考える

かねしげ つとむ
兼重 努

滋賀医科大学医学部准教授

専門は文化人類学、地域研究。今後は中国における中央と地方、漢族と少数民族のあいだの相互交渉の研究、ならびに風水思想、積徳行、運命観や公共観念を対象とした通文化的比較研究をすすめてゆきたい。

水は飲み水として、また生活・農業用水などとして、人びとの日常生活に必要不可欠である。こうした日常的な実用資源という側面に限らず、水は文化によって多様に意味づけされている。たとえば、中国に源を発し東アジア諸国に広く伝播している風水思想において水は独自の意味を担っている。

わたしが調査している西南中国の少数民族トン族の村落社会も風水思想の影響を受け、風水知識が流布し、風水実践もさかんである。トン族は貴州省、湖南省、広西壮族自治区の境界地域や湖北省鄂西に居住するタイ系の少数民族で、人口二九六万人（二〇〇〇年の統計）である。

広西・三江トン族自治県北部にあるわたしの調査地では集落の内部や近辺を流れる水が重要だ。なぜなら水流は住民に吉凶禍福をもたらさうと意味づけられているからだ。凶禍を避けたり、吉福を呼び込んだり

するために、地元民はさまざまな実践をおこなっている。以下、自村に入試合格者を輩出させることを目的とした風水実践の事例を紹介しよう。

新鼓楼の建設

わたしの調査地A村には集落の中心部に建設年代不詳の鼓楼があった。にもかかわらず一九九二年から翌年にかけて新鼓楼を増設した。鼓楼とはトン族の集落に建てられる、塔のような形状の木造公共建築物で、お



錦溪の湾曲地点に建つ新鼓楼

ること、村を美しくし、外国人向けの観光スポットを作ること。以上が彼の当初の答えであった。あとでわかったことだが、彼はあくまで副次的な目的を述べたにすぎない。

建設の真の目的

Y氏が新鼓楼建設の真の目的をわたしに教えてくれたのは、聞き取りを重ねてのちのことであった。答えは集落の風水の改善であった。当初彼が風水の話題を避けていたのは、当時の中国において、風水は迷信として政府から糾弾されがちな日陰者の存在だったからだ。

Y氏によると、以前、川向こうの村では高校や師範学校などに毎年五人くらの合格者を輩出していたが、A村では誰一人として合格できなかった。シャーマンに見てもらったところ、集落の「風水の配し方」がよくないことが原因とわかった。「風水を配する」とは周囲の自然環境が風水理論に照らして理想的でない場合、自然環境に手を加えて不足を補い、風水を改善することをいう。集落の風水を改善すれば村の子どもたちを上級の学校に送りこみ、賢くて高級な人材を育成できるようになる。高等教育機関に進んだ村の子弟が卒業後、官僚になれば、将来、出身村に財物をもたらされることが期待で

きるのだ。

風水改善の具体的方法

風水改善の具体的方法は、錦溪のほとりの湾曲地点を選んで鼓楼を建てることであった。

なぜ錦溪のほとりなのか。錦溪は集落の背後に迫る、「龍脈」とよばれる山並みに由来する。龍脈の末端部分の「カ所」には龍脈を伝わってやってきた「気」が集中している。その地下には水路があり、これが錦流となつて集落に向かって流れ出ているのである。

新鼓楼に期待される役割は何なのか。それは錦溪の流れとともに集落外に流出していた目に見えない金銭や食糧などの財物をせきとめ、集落内に残すことだ。新鼓楼の建設にあたり、自村からの官僚輩出を願つて、Y氏はその柱の長さを「魯班尺」という物差し「官」という目盛りで

あわせた。これは官僚輩出につながる吉の目盛りである。

なぜ湾曲地点なのか。溪流のもたらず財物をせきとめ、集落内に残すために最適なのは溪流の湾曲地点であり、真つすぐ流れている地点はよくないとされているからだ。

建設後、効果はすぐにはあらわれなかった。一九九四年以降A村から毎年少なくとも一、二人は高校や中等専門学校に受かるようになった、とY氏はうれしそうに語ってくれた。

一九九七年、Y氏の娘婿が「錦溪亭頌」と題する、錦溪亭を褒め称える詩文を亭内に掲示した。なかに「玉柱を吉地に建て、財源が永久に（集落外に）漏れないようにしっかりと保つ」（玉柱立吉地、保住財源永不漏）という一節が盛り込まれていた。「玉柱」は錦溪亭、「吉地」は錦溪の湾曲地点、「財源」は財物をもたらす錦溪の水流をさす。地元民向け、かつ詩文形式のメッセージといふものの、建設の真の目的が公開されたのは少し驚いた。

わたしの調査地では、水流にまつわる風水知識や実践にかかわる事例はほかにも数多い。興味をおもちの方は『人と水2 水と生活』（秋道智彌・小松和彦・中村康夫編、勉誠出版、二〇一〇年刊）所収の拙稿もあわせてご覧いただければ幸いです。



新旧の鼓楼の位置関係



集落とその背後に迫る龍脈

もに村人の集会所として用いられる。新鼓楼の建設地点は集落のはずれの溪流のほとり。この溪流の名称にちなんでそれは「錦溪亭」と命名された。調査地近辺で集落に鼓楼が増設されるのは、村落共同体内部が分化した場合が一般的だ。しかし、今回はどうみてもそうではない。そこでわたしは錦溪亭建設の中心人物Y氏（男性、一九二五年生）を訪ね、建設目的について聞き取ることにした。錦溪亭建設の目的は、集落内に公共の場所、娯楽・納涼の場を増設す



錦溪亭に集う地元の人びと

編集後記

4月は、リフレッシュの季節、民博でも本館展示の音楽展示と言語展示が新しい姿になった。本誌でも今後、これにちなんだ特集を組んでいく予定である。

4月はまた、いろいろな考え方をリフレッシュする機会でもある。世界の近代史を振り返り、これまでのライフスタイルについても、今一度、考え直すことも必要ではないだろうか。その意味で、本号の特集で伺った辻信一氏のお話は示唆に富んでいる。

辻信一氏へのインタビューは長時間におよんだが、残念ながら誌面の制約から、プータンに関するお話を紹介できなかった。スローライフと幸せは何かを追求する辻氏は、GNH（GNP=国民総生産ならぬ国民総幸福）を国是とするプータンにも関心が深く、何度も訪問されている。GNHは、2008年に制定された憲法第9条にも明記され、経済発展は環境保全や文化的独自性と調和をとらねばならぬ、とするものだ。リーマンショックをもち出すまでもない、経済成長が人びとを駆り立てた結果、世界中で何が起きているのか。わたしたちもGNHをヒントに、考え直す時期に来ているようだ。（久保正敏）

次号の予告

特集

古代アンデス 黄金の墓を掘る

月刊みんぱく
2010年4月号

第34巻第4号通巻第391号 2010年4月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 西尾哲夫
編集委員 久保正敏（編集長） 佐々木史郎 庄司博史
中牧弘允 信田敏宏 山中由里子
制作・協力 財団法人 千里文化財団
印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係に
お願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

- 予定時間 14時30分から15時30分（予定）。
- 本館展示観覧料が必要です。
- *都合により、予定を変更することもあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！

「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別！
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

4月の開催

4月4日（日）

話者：陳天璽（民族社会研究部准教授）

話題：文化の越境を考える～チャイナタウンの獅子舞から～

場所：中国地域の文化展示

4月11日（日）

話者：飯田卓（文化資源研究センター准教授）

話題：昭和30年代の
海外エクスベディション映画

場所：本館展示場内休憩所

4月25日（日）

話者：吉本忍（民族文化研究部教授）

話題：伊勢の染型紙

場所：企画展「伊勢の染型紙」会場



ボールの上でアクロバティックに舞う獅子

1年間みんぱくに何度でも入館できる

「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

常設展は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいあります。

- ◆特典◆常設展の無料入館◆特別展の観覧料割引
- ◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
- ◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06-6877-8893 / 平日9:00～17:00）



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

